

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 公共善の彼方に 後期中世シエナの社会

氏名 池上 俊一

本論文は、イタリア中北部、トスカーナ地方の小高い丘の上に位置する美しい中世都市シエナの、後期中世における政治体制と社会的結合関係との関わりを、〈公共善〉をキーワードに解き明かすことを目標とする。

シエナでは、理想の統治と称えられることのある「九人衆統治体制」Noveschi時代（一二八七～一三五五年）においてさえ、他のイタリア都市国家同様、貴族や富裕なブルジョワたちが、都市政治の主導権を握ろうと争いを繰り返し、また富裕層と貧しい賃労働者との反目、階級闘争も間歇的に発生した。都市内部の争いは、外部の他都市との領有権争いや覇権争いと重なり、さらに上位の権威・権力たる皇帝・国王と教皇への忠誠・離反の動きとも連動して、複雑な様相を呈した。政権に就いた者たちは、なんとか秩序を取り戻そうと、つぎつぎ法律を定め、裁判を行い、警備を固めた。しかし、こうした一見私利私欲・党派心の塊のようなシエナ市民たちが、同時に、公共の福利と名誉に挺身したことも事実なのである。そこには、ギリシャのポリスと近代の国民国家に挟まれた、中間の時代に開展した「自治都市」の政治理念、とりわけその精華としての〈公共善〉理念が関係しているだろうし、その時代の都市住民たちの間に編み上げられた、独特な社会的結合関係（ソシアビリティ）のあり方にも着目しないと、この不思議な現象は十分理解できない、と思われた。

そこで本論文では、都市が理想として追求したものと、人々の社会関係ないし社会的結合関係のもろもろのパターンの双方を視野に収めながら、五つの観点から政治と社会の関係を探り、中世自治都市に秘められた可能性を探究してみた。

第一章「行政上の地理区分と市民」では、後期中世シエナにおいて、いわば公的に、誰が仲間・味方であり、誰が外部の人間・敵と看做されたかについて、人々の居住区域ごとの法的な扱いの違いを解明するとともに、「市民」としての公認がいかん認められたかを、規範史料から考察した。具体的には、都市の都市性（シエナのシエナ性）が同心円状に広がっていたことを、チッタ・ボルゴ、マッセ、コンタードについて調べることでまず明らかにした。それから、市内が三分区とコントラーダ／ポポロ区に分割されながら、都市の行政・軍事が展開するだけでなく、日常生活や日々の付き合いも、こうした区分に規定されていたことを示した。また都市の住民でありながら、排除・差別されていた「劣等市民」「外人」についても、そのあり方を検討した。

第二章「さまざまな仲間団体」は、本論文の中核をなす部分であり、血縁団体、職能団体、遊興団体、信仰団体の四つに区分して、つながりの原理や外部世界との関わり、そしてとくに、都市に生きる市民たちにとって、それぞれの人間関係がどんな意味を有していたのかを解明した。〈公共善〉という観点からは、都市当局の目論見・方針・理想と、各仲間団体の、目論見・方針・理想が、どう協力・交差するのか、あるいは対立するのか、こうした点も考察した。

第三章「噂と評判の世界——犯罪記録から」では、十四世紀を中心とした、シエナにおける犯罪に焦点を当てることで、逆に当時の社会的結合関係を炙りだした。とくに、シエナ国立古文書館に所蔵されている「ポDESTÀ」Podestàという裁判記録を使用し、一三四二年に「サンタ・マリアの新ボルゴ」で起きた些細な事件を読み解いてみた。そこから、あくまで〈公共善〉を代弁する「正義」を行使しながら、犯罪を裁いて都市の名誉を守ろうとする当局に対して、一般市民たちは、別の名誉を持ち出す部分があることが判明したし、また、近隣の人間関係が、擁護と告発の濃密な言葉のやりとりとともに浮かび上がって来、公的な社会のヴィジョンとまったく異なる社会のヴィジョンが透かし見えることとなった。

第四章「社会関係の結節点」では、中世のシエナ市民たちが、都市の中での自分の場を定点観測し位置づけ、

(別紙1)

また周囲の人々とその重要性を共有することで、アイデンティティーを確認していった「トポス」を取り上げた。すなわち市門、市壁、教会、市庁舎などだが、多くの人が日々集まる「広場」がとりわけ重要であり、したがって本章後半では、シエナの中心広場であるカンポ広場を、支配空間、商業空間、社交空間、聖なる空間として吟味した。これらのトポスは、政権担当者と市民たち、双方の表象が相異なる場合もしばしばあったが、そうした齟齬を調整し、それぞれの局面で都市全体にとって、あるいは関係団体にとって、重要な意味を賦活するのが「儀礼」の役割であることを、行列に注目して省察してみた。

そして第五章「イメージの媒介力」では、当時のシエナ人たちのこころを捉え、あるいは糾合させるのに活躍したイメージについて考えてみた。具体的には、水と血、そして聖母マリア、動物なかでも狼である。これらは、都市当局自らが、市民に対して、あるいは外部に向かって都市の名誉ある来歴を宣揚するために使われる公的な意味の傍らに、より古い異教時代に溯るレベルから汲み取られる意味もあって、住民らはむしろ後者に惹かれることが多かった。都市当局は、だから単純なイメージ誘導はできなかつたし、住民たちが勝手に、それぞれの社会的結合関係の強化や理想護持のために、こうしたイメージを使うこともあったのである。第四章と第五章では、当局による〈公共善〉実現の手立てとして登場したものが、その変容の手段として操作される可能性が示された。

最後に「むすび——後期中世都市の世界、新たな公共善へ」においては、一章から五章で明らかになった事実をもとに、後期中世の都市における〈公共善〉のあり方とその限界、さらにはそれを超える可能性について、示唆した。

本論文のもっとも主要な眼目である、都市における〈公共善〉の変容についてあらためて述べておけば、政権担当者によって上から押し付けられる、あるいはエリートたちの〈公共善〉に対して、下から積み上げられる、いわば民衆的な〈公共善〉理念が、シエナという自治都市国家において誕生した理由は、この「聖母の町」には、とりわけ濃厚かつ稠密に結ばれた「聖なる絆による人間関係」が存在したからである。この社会的結合関係を考える上では、まずなにより、シエナが世界に誇る巨大な慈善施設、サンタ・マリア・デッラ・スカラ施療院の役割が重要であった。当施療院は、都市当局と密接に連携して発展したため、やがて都市の一機関のような観を呈し、保護と引き替えにさまざまな規制を課せられるようになった。だが同時に、多くの献身者の慈愛の発露に支えられながら、おびたしい住民を巻き込み、経済活動でも社会関係でも、世俗政治の目指す方向とは別次元の方向へと、都市と都市民を導いていったのである。

またこの巨大な施療院は、信仰深い数多くの人々の善意なしにはまったく存在できない組織であった。それは篤い信仰心以外、なにも持ち合わせない、個人としての俗人たちが「兄弟」「姉妹」となって中心を支えていた。その兄弟・姉妹たちは、シエナとその周辺に広まった、無数の小さな信仰団体、第三会やジェズアーティ、マンテッラーテ、信心会などに属する人たちと、相似た目標を掲げて活動をし、実際に相互に交流があった。サンタ・マリア・デッラ・スカラ施療院を中心とする、おびたしい信仰者たちのネットワークによって作り上げられた霊的な社会的結合関係は、他の形態の社会的結合関係・団体と交差しオーバーラップしつつ、都市の理想的秩序、〈公共善〉のあり方をも、変えていく力を具えていた。

その実現への道に大きく歩を進めたのが、十四世紀後半という時期だった。それはつまり、俗人の霊性の特異な発揚によって、もっぱら世俗的な理念であった〈公共善〉に、新たに霊的な次元が加えられたからである。シエナの聖女カテリーナをはじめとする宗教家たちの活動が、この十四世紀後半に、もっとも大きな高揚を迎えたという理由もそこにはあるが、多種多様な慈善事業や俗人宗教活動が大展開し、人と人との関係に変化が生まれたという、より広範な事情も与っている。家族や隣組・職業による結びつきを離れ、ましてや政治的な党派を軽々と超え、ひいては〈公共善〉からも排除されていた貧者・下層民・マルジノーなどをも組み込みうる新たな社会的結合関係が発展し、それにより〈公共善〉の理念にも変化が起きた、という訳である。